

An abstract illustration in shades of red, pink, and grey. It depicts a person's head and hands in the process of painting a cityscape. The person's face is a large, rounded shape with a white eye and a pink nose. Their hands are shown holding a paintbrush and a palette. The background is a mix of solid colors and patterns, including polka dots and a grid. The overall style is modern and graphic.

P*NT
BOOK

Vol. 1



2023年4月、日建設計東京ビル3Fにオープンイノベーションの場として誕生したPYNT(ピント)。「共創」をテーマに、社内外の様々なコラボレーションを促進し、新たな価値を生み出す役割を担ってきました。設立から約2年が経ち、PYNTは場を超えた「共創プラットフォーム」として、より良い未来を目指して活動しています。

今回、PYNTが歩んできた軌跡と変化し続けるPYNTの「今」を多くの人に伝えるため、初めて“PYNT BOOK”を制作しました。このブックは単なる活動報告ではなく、「PYNTらしさとは何か」「もっと多くの人にPYNTを活用してもらうにはどうすればいいか」を考えながら、大切にしている想いを言語化し、その仕組みや活動を紹介しています。

すでにPYNTと関わりのある方にはさらに深い関係を、まだ訪れたことのない方には新たな接点を生むきっかけになればと願っています。

CONTENTS

PYNT BOOK Vol.1

TRY & TRY

試行錯誤で積み上げる「共創」のしくみ

- 4 日建設計とPYNTをつなぐ「社会環境デザイン」
- 8 FUTURE COLLECTIVES
- 14 PYNTのCo-creation step

KEEP GROWING

広がり続けるPYNTコミュニティ

- 16 PYNT for ME — 私にとってPYNTとは？
- 20 PYNT“チーム”が耕し、コミュニティからつなぐバトン

UPDATES

2023-24年の軌跡

- 26 数字でみるPYNT
- 28 NEWS BOARD



試行錯誤で
積み上げる
「共創」のしくみ

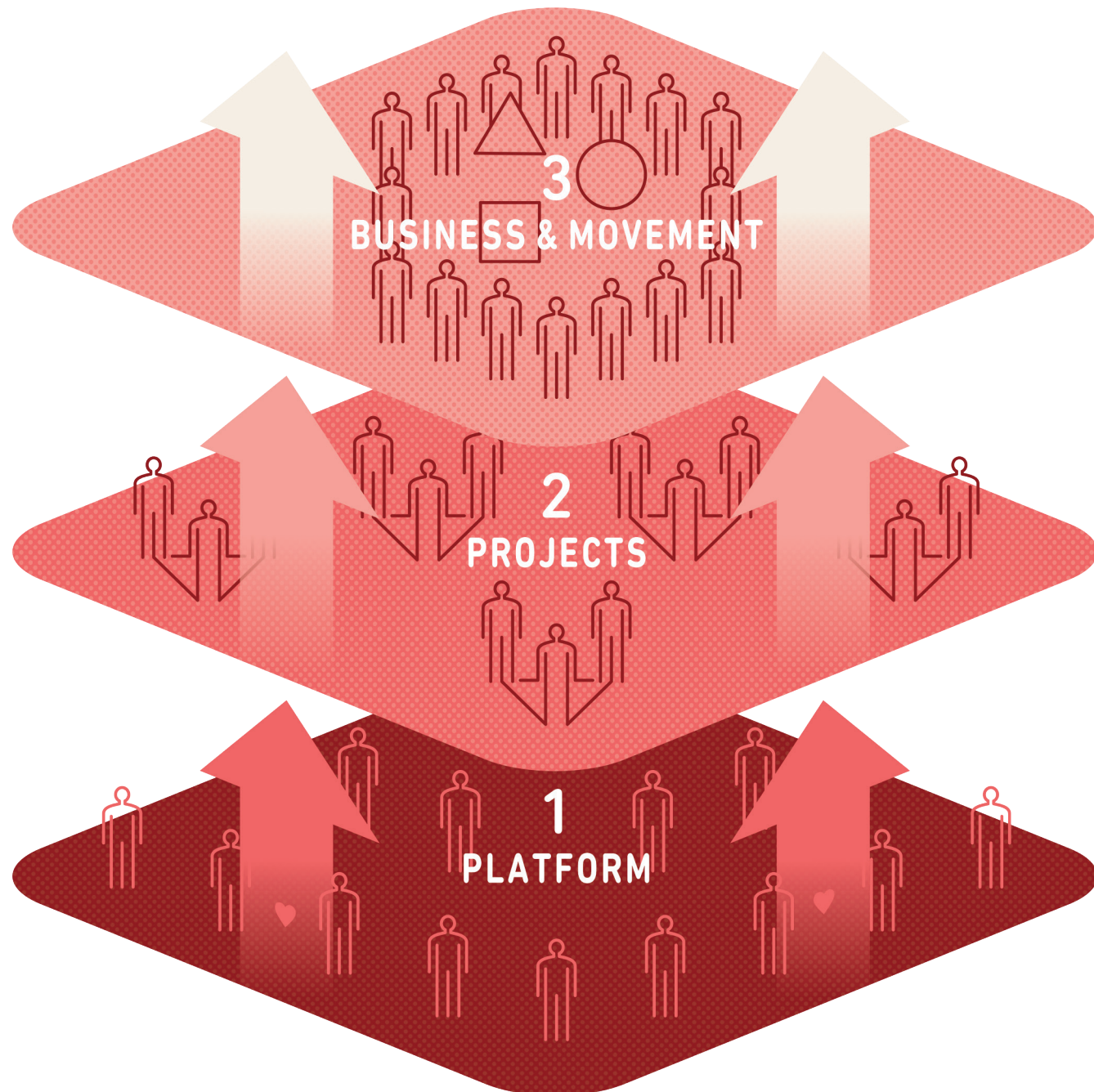
TRY & TRY

日建設計とPYNTをつなぐ 「社会環境デザイン」

PYNTは「まちの未来に新しい選択肢をつくる共創プラットフォーム」として活動を広げています。

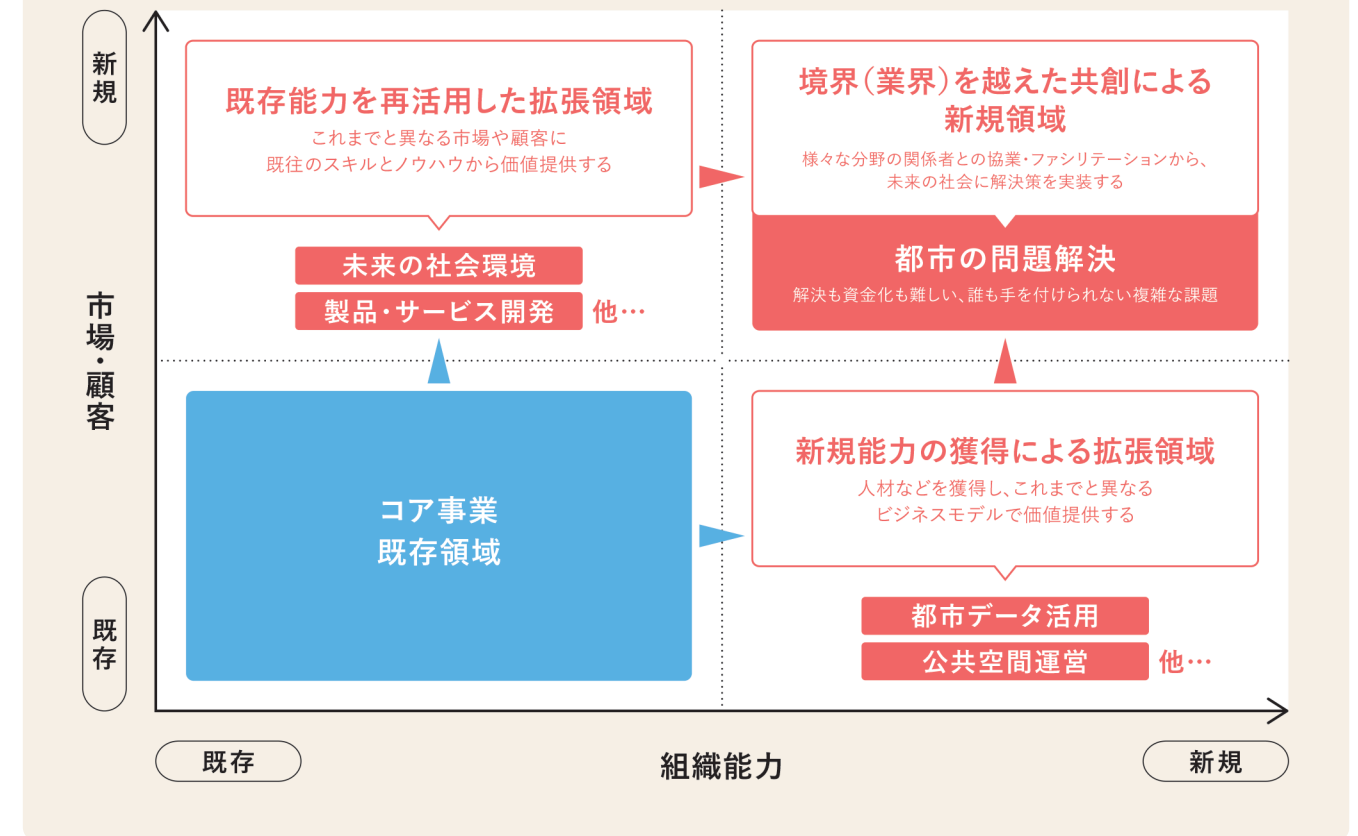
PYNTで一体どのようなことができるのか？

日建設計とPYNTはどのような関係か？ 私たちPYNTについてご紹介します。



PYNT×日建設計におけるイノベーション発生のプロセス

『既存・拡張・新規』の3段階のうち、PYNTが扱うのは拡張・新規の領域



PYNTが取り組んでいる領域を示した図。日建設計のコア事業で培ってきたスキルや専門性を活かしつつ、新しい業界や専門性との接点をつくりながら共に都市/まちの課題を解決していくのがPYNTの役割。

地域のエネルギー循環を実現するにはどうすればいい？空飛ぶクルマで未来のまちはどう変わる？現代人のメンタルヘルスに関する課題を解決するためにデザインができることは？——。

これらは、PYNTで進行しているプロジェクトのほんの一部です。PYNTは、2023年4月に、まちの未来に新しい選択肢をつくる「共創プラットフォーム」としてオープンしました。「社会環境を“共有財”の視点からリデザインする」をパーパスに掲げ、意志を持った課題の当事者や解決の担い手と、日建設計が持つ建築や都市に関する専門性をつないできました。まずはここで出会った人々が小さな活動を始め、少しずつ横断的な「プロジェクト」へと広げるサポートしています。さらに社会実装につなぐ基盤となる活動に押し上げるため、数年以上の長期的な視点を持って、ビジネスや社会課題を解決するムーブメントへとつなげていきます。

私たちの活動を一言でいうと、「多様なステークホルダー

とともに社会環境デザインに取り組む」ことです。まちと暮らしについて俯瞰的な視野と多様な視点を持ち、複合的に社会課題を解く仕組みを考え、人の暮らしや環境をより良くしていくこと、それを私たちは「社会環境デザイン」と呼んでいます。すなわち、「まちの要素」と「社会の課題」を掛け算しながら、さまざまなステークホルダーを巻き込み、共有・共感できるゴールを創り、複雑な課題をリフレーミングすること、を、PYNTでは考えています。

例えば、子育てという個人に閉じてしまいがちな課題を、「公園」と掛け合わせて、まちの視点からとらえてみると、「公園を起点にした送り迎え」や「地域で子どもを見守る仕組み」など、課題解決のアイデアの発想が広がります。また、公園の新しい運営の仕方につなげることができるかもしれません。私たちはこのような仕組みや考え方をもちながら、組織や立場を超えた出会いから社会実装までをサポートしています。

“ PYNTは、「個人の想いを企業活動につなぎ、」
社会にインパクトを創る」ための活動の場

そのために、PYNTは「FUTURE COLLECTIVES」
(P8参照)という探求と実践が循環するコミュニティをつくっています。これは、ありたいまちの未来を2つの軸で表現することで、それぞれ同じテーマに関心を寄せる人たちに会うことができ、複数の視点で共に考え、実践を促す取り組みです。PYNTでは、想いのある人がプロジェクトを生み出すのに必要な要素(課題・場所・技術・資金)のどれを持っているかを意識しながら、実践していけるような組み合わせを意識してつないでいます。

なぜ「社会環境デザイン」なのか

PYNTが生まれた理由は、日建設計の1900年の創業から今に至るまで活動してきた価値観にあります。日建設計は世界中で建築の設計・監理や都市開発などのプロジェクトを手がける組織設計事務所です。そのため、一見「設計をしている会社」と思われるかもしれませんが。しかし実際は、多様な専門性を掛け合わせることで、目に見えるデザインだけではなく、その根底にある仕組みや制度、組織、生態、データ、あるいは多様なステークホルダーと幅広く新しい価値を創ることを共に考え、総合的にデザインしてきた企業です。時代と共に変化する社会課題を解決するために、幅広く関係性を構築し、最終的にまちや建物に落とし込む。まさに「社会環境デザイン」の先端を拓くことに挑戦してきました。

日建設計は、2021年に打ち出した中期経営計画で「社会環境デザインプラットフォームへ向けた進化」というビジョンを掲げました。これは、社外のステークホルダーと共に、これまでの取り組みをより加速させていくためのものです。その実装の場として開設されたPYNTは、一般的な仕事のプロセスとは異なる「個人の想いを企業活動につなぎ、社会にインパクトを創る」ための活動の場となっています。

試行錯誤から、未来をつくる

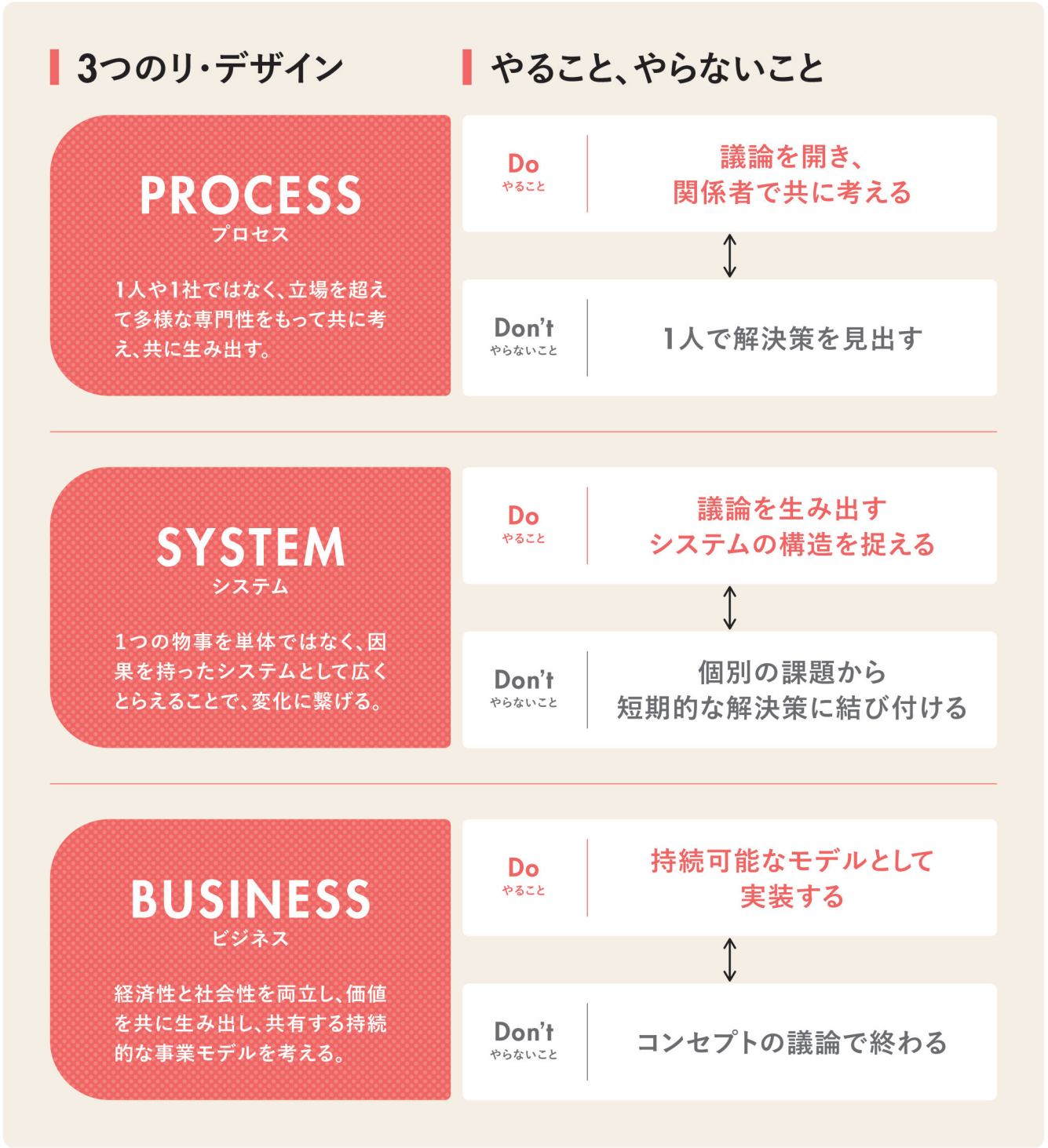
設立から約2年の間に、社内外の多様な人々がPYNTを訪れ、そこから30を超える小さな実践=プロジェクトが生まれました。そのうち6つがトライアルのフェーズに進むなど、徐々に大きな構想=社会実装へと動いています。同時に、それらを推し進める共創の仕組みや、具体的なアプローチ手法も徐々に確立し始めています。

共創を進める難しさに試行錯誤してきた2年でしたが、様々な共創プロジェクトが生まれ、2025年から社会起業家との共創プログラム「FUTURE LENS」が始動、新たな拠点が増える計画も進むなど、着実な歩みを続けています。

私たちはPYNTを、単なる「場」の名称ではなく「社会環境デザインを推し進める活動」だと考えています。小さなトライを繰り返しながら、真摯に社会課題と向き合い、個人の想いを新しいまちの選択肢として実現できるよう活動を続けていきます。

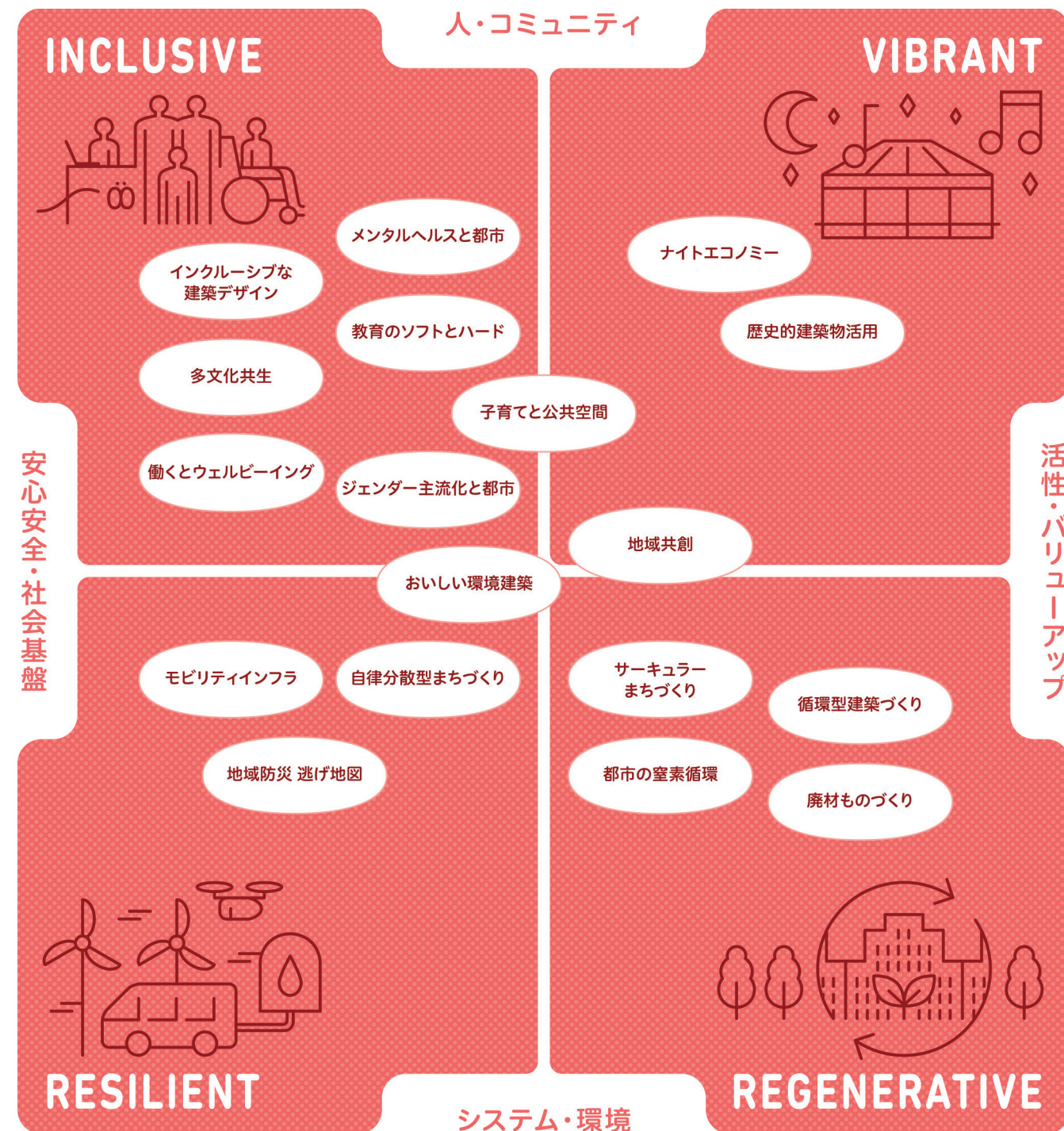
PYNTの
社会環境デザイン
アプローチ

まちは、社会課題を解くフィールドである。「個別の課題」を「まちの視点」から捉えることで課題をリフレームし、より良いまちと暮らしのための新たな価値観・サービス・空間・市場を生み出すことができる。そのために、PYNTはプロセス・システム・ビジネスという3つの視点から「リデザイン」を行い、課題の可視化や関係者の巻き込みをしながら変化を実現する社会課題解決に取り組んでいる。



FUTURE COLLECTIVES

FUTURE COLLECTIVES(以下FC)とは、同じテーマに関心を寄せる人たちに会い、共に考え、実践していくコミュニティのこと。下図は、PYNTが考える「ありたいまちの未来」を4つに分類したものであり、同時に、PYNTで今どんなプロジェクトが動いているか見える化したものでもあります。社会環境デザインの視点から課題をどのように捉え、どのように進めているか。フェーズはそれぞれ異なるものの、FCのなかから現在進行中のプロジェクトを5つご紹介します。



どうすれば、地域のこれからを立場を超えたみんなで考え、今ある資源を活かした移動やインフラのしくみをつくれるか？



概要

地域における移動やインフラの課題は深刻化している。政府も、移動は教育・医療・福祉・娯楽・子育て・学校・防災・観光・物流など様々な分野につながっており、このような地域の基盤が崩れるときわめて大きな影響があるとしている。その一方で、住民の声としてまだまだ多いのは「今はまだ困っていない」「人が減っているから仕方ない」といった現状への満足や諦めだった。

Community Driveプロジェクトでは子育て世代・若者・高齢者・行政職員・事業者の様々な立場から生活や移動の課題を集めて可視化し、「こうしたら変えられるかも」というアイデアや「こんなことを既にやっている」という実践事例をみんなで共有するところから、自分たちの生活環境を考える対話の機会をつくっている。

並行して、その地域のインフラや公共交通の維持にかかっているコストの試算や、「移動資源」と呼んでいる住民の車・タクシーやバス・電車やトラックなど事業車両・公用車などの台数、それらの維持費やルートの定量化を行うことで、どんな可能性があるかを考える土台となるデータを収集。可視化した課題やデータを元にまずは10年後に向けた地域のありたい姿と生活を考えていくプロセスとツールを開発している。



ステークホルダー

- ・子育て世代、若者、高齢者などの地域住民
- ・行政職員
- ・地域交通事業者
- ・地域に根ざした企業
- ・社会福祉協議会から派生した福祉分野の団体
- ・課題の可視化を行うシンクタンク
- ・記者・住民の参加を促すPRの専門家
- ・デザイナー
- ・国土交通省 など

移動・インフラ課題
市民参加

どうすれば、 民間企業と地域が連携し、 子育て環境を支えられるか？

概要

仕事と育児の両立は、多くの子育て世帯が直面する課題だ。PYNTでは、これを個別の家庭内の問題としてではなく、地域全体で取り組むべき課題として捉えた。アサヒ飲料株式会社と協働し、同社の飲料ブランド「カルピス®^{※1}」が持つ情緒的価値を基盤に、子どもの成長を象徴する公共空間としての「公園」を中心に据えたサービスコンセプトを開発した。

プロジェクトの根幹は、子育て環境を地域で支えるための仕組みづくり。そのために、親子と子どもとポジティブに距離を取る時間を持つことで、親子関係を深めるという視点を取り入れた。具体的には、渋谷区立北谷公園^{※2}において、地域イベントと連携しながらPoC（概念実証）を実施し、公園を単なる遊び場にとどまらず、親と子がそれぞれ良い時間を過ごせる場として再構築した。

さらに、この取り組みは公園の指定管理者として培ったリソースや周辺地域とのネットワークを活用し、地域とブランドの新たな接点を形成することも目指している。今後は、この体験や活動を通じて、飲料メーカー自身のブランド価値を高めることにもつなげるという経営価値にも貢献しつつ、子育て環境をより良くするサービスに

つなげていきたい。現在、PoCで得られた調査結果と、保育やケア、コミュニティの専門家へのヒアリングをもとに、仮説の評価とさらなる可能性を模索している。これらのプロセスは、単なる課題解決にとどまらず、公共空間を基盤とした地域全体の価値向上に寄与する新しいまちづくりのモデルが考えられるかもしれない。

ステークホルダー

- ・飲料メーカー
- ・公園指定管理者（日建設計）
- ・公園周辺の地域事業者
- ・保育事業者
- ・子ども向けコンテンツ事業者
- ・仕事と育児の両立を目指す当事者 など

子育ての課題

公共空間

※1「カルピス」はアサヒ飲料株式会社の登録商標です
※2 日建設計は設計、指定管理者の一員として管理運営にも関与しています

どうすれば、社員の専門性と 地域のニーズを融合し、 自治力を支えるまちを 共創できるか？

概要

2023年に日建グループが立ち上げた「地方創生サロン」は、地域の創生と共創を考える社内プラットフォームである。この取り組みは、地域が抱える課題に対して、建築・都市分野で培った専門的知見と、社員一人ひとりの経験や趣味などの幅広いリソースを掛け合わせることで、新たな解決策を生み出すことを目的としている。

「地方創生サロン」は、社員が自主的に地域とつながり、課題解決に向けた対話やアイデアの共有を行う場として機能している。まちづくり活動の支援や地域でのワークショップのデザイン、地域で活躍する社員によるイベントの開催など具体的な取り組みを進めることで、地域と社員双方にとって持続可能な関係を築いている。これにより、単なる課題解決にとどまらず、地域の自治力を支える新しい仕組みづくりを目指している。

現在、歴史を踏まえたまちづくりや復興、気候変動への対応をテーマに、地域の当事者とともに具体的なアクションを模索している。これらの取り組みは、社員の専門性と地域のニーズを融合させることで、地域共創型のまちづくりのモデルを提示する試みでもある。

ステークホルダー

- ・意志を持ち主体的に地域に関わる日建グループ社員
- ・活動したいと思っている日建グループ社員
- ・課題を抱える地域の当事者
- ・すでに地域で活動している実践者や専門家 など

地域経営

社員の共創プラットフォーム

どうすれば、都市におけるメンタルヘルス課題のソリューションをデザインできるか？

概要

日本においてメンタルヘルスの課題は個人の課題とされることが多いが、その影響は深刻であり、これに伴う経済的損失は年間約2兆円に上ると推計されている。特に都市部では過密な生活環境や孤立感、ストレスフルな労働条件が、この問題をさらに悪化させている。

こうした背景のもと、PYNTはこの課題に対して、メンタルヘルスの専門家だけでなく、デザイナーやAIの専門家、都市計画の専門家など関心をもつ幅広い立場の有志がアイデアを生み出し、具体的なプロジェクトへとつなげる場を提供している。

このプロジェクトでは、メンタルヘルスを取り巻く環境や状態を「課題構造マップ」として可視化し、複雑な要因の相互関係を明らかにした。その中で、特に強い要因である「トラウマ」をキーワードにAIを活用した分析を行い、多角的な観点から都市の在り方や解決策を模索している。こうしたプロセスを通じて、メンタルヘル

シーな空間デザインや公共貢献用途としての提案の可能性、さらには組織におけるピアサポートの仕組みといった具体的なアイデアが生まれている。現在、これらのアイデアを実現するための具体的なプロジェクトが検討段階にあり、都市におけるメンタルヘルス課題の解決に向けた新しい視点と方法論を提示しようとしている。

ステークホルダー

- ・都市開発の専門家(日建設計)
- ・内科・心療内科医
- ・作業療法士
- ・メンタルヘル스에悩む当事者
- ・AIコンサルタント
- ・インテリアデザイナー
- ・大学教授
- ・デザイナー など

メンタルヘルスの課題

オフィスや都市空間

どのように都市の见えない環境負荷を可視化し、人と自然が真に共存できるようにするか？

概要

都市の土地利用と、地上からは見えない土中環境の「見える化」を目指すプロジェクト。本プロジェクトでは、水や窒素の質・量に着目し、都市開発や建築がもたらす環境負荷を定量化するためのデータ測定と標準モデル化を進めている。これにより、都市環境を取り巻く課題を「誰にでもわかる形」で共有し、人と自然の関係をともに考え、アップデートできる未来を目指している。

気候変動対策やネイチャーポジティブの動きが進み、「自然によいことと、人間によいことの交点」にこそ、これからの価値が生まれる。そこで、都市環境を「流域」という単位で捉えなおすことで、治水はもちろん、建築・土木というハードのあり方や、自然と経済・費の関係を明らかにしていこうとしている。

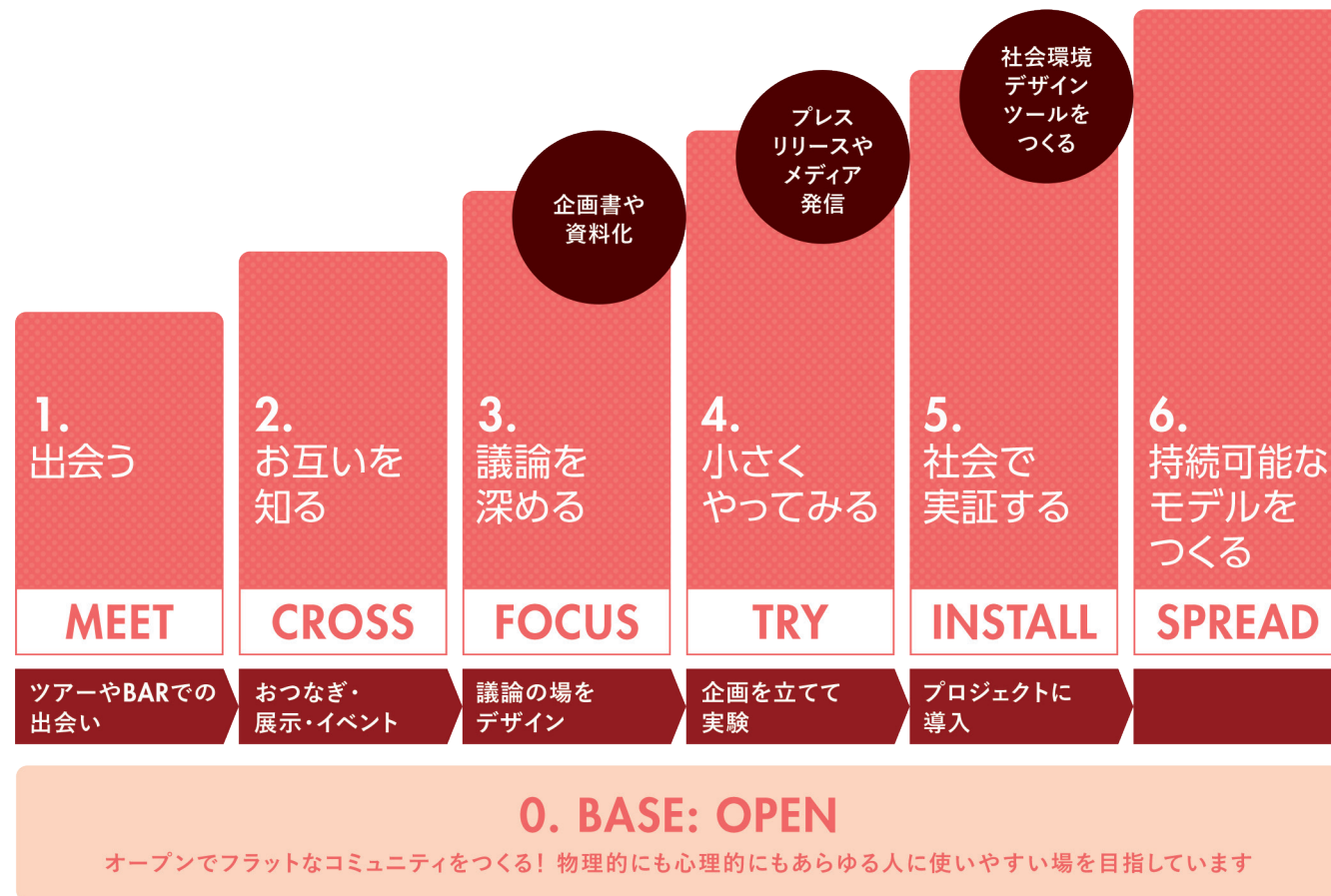
この取り組みでは、Code for Ground という土中環境をオープンデータ化を目指すプロジェクトと協業し、敷地単位で水の質・量の測定を行い、都市における水・窒素等の変数の指標化、測定方法の確立に取り組んでいる。

ステークホルダー

- ・Code for Ground(土中環境オープンデータプロジェクトの担い手であるシビックテックのテーマ)
- ・環境や微生物の研究者
- ・測定器のメーカー
- ・都市開発・ランドスケープの専門家(日建設計)
- ・造園資材メーカー
- ・関係省庁 など

土中環境 × 都市緑化

PYNTのCo-creation step



PYNTは独自の「共創ステップ」を持っています。それは、人をつなぎ、プロジェクトを生み出す仕組みで、ステップごとのアクションや、次のステップに至る条件などの目標まで落とし込まれています。同時に、伴走するPYNTチームの必要スキルも定義することで、プロジェクトを推進しイノベーションへつなげるための動きも明確にしています。

STEP0はプロジェクトではありませんが、場所としてのPYNTのオープンでフラットな雰囲気を活かして、後のステップが円滑に進むためのコミュニティの入口となり、新しい価値を生み出すためのベースとなる状況をつくります。

STEP1～2は「出会い、知り合う」段階。まずは会話を通じ、その人の想いや課題感、強みなどを汲み取ること。そして、同じ興味関心や課題意識をもつ人同士を引き合わせたり、議論の場を設定したりすることでネクストアクションにつなげる共創の土壌を耕します。

STEP3～4では、課題を共有し、検討の方向性に共感した人同士で議論を深め、小さく始める段階です。課題

の構造化から、ステップごとのゴール設定などを行いつつ、社会環境デザインの視点からステークホルダーを巻き込んだ議論の場をつくります。イベントや展示の企画、システミックデザインを用いた課題の可視化・構造化、フィールドワークを通じたデザインリサーチなどを通じて課題を整理し、そのために必要な技術・場所・資金などを合わせて考えることで、活動を後押ししていきます。

STEP5以降は、社会へ実装していく段階です。例えば、地域の移動課題を解決する「Community Driveプロジェクト(P9参照)」では、富山県黒部市で実証実験を行っており、そこで得た知見や仕組みをもとに他地域へと展開していく、つまりSTEP6の「持続可能なロールモデルをつくる」という段階へ移行しようとしています。

PYNTでは短期的な成果だけではなく、中長期的なインパクトを生み出すために実際の課題解決に取り組みます。数年にわたる期間を共にしながら、想いを持った人に最大限のサポートをしていきます。

広がり続ける
PYNTコミュニティ

KEEP GROWING

PYNT for ME

——私にとってPYNTとは？

PYNTの特徴のひとつである「オープンでフラットなコミュニティ」の一部をご紹介します。日々様々な所属の人が訪れ、コミュニケーションを取り、共創プロジェクトに参加し始めています。ピンときた人がいたら、ぜひPYNTチームへ相談ください！

Q1 PYNTの利用頻度は？

Q2 PYNTで共創してみたい興味関心のあるテーマ・領域・社会課題は？

Q3 「あなたにとってのPYNT」を一言で表すと？

Q4 あなたの専門性を表現すると？

真嶋信二

一般社団法人COMHCα

A1 2週に1回

A2 都市課題とメンタルヘルス、働くとウェルビーイング

A3 ぽかぽかと共振と創発を醸してくれる場

A4 #メンタルヘルス #対話と協働
#Managing Oneself
#Healing and Transformation



伊藤愛

日建設計 スペースデザイングループ

A1 毎日！

A2 ホテル同好会/インテリア好きの集まる会

A3 いやし

A4 #ホテル愛好家 #インテリア



中川晃太

日建設計総合研究所 都市部門

A1 2回/週

A2 都市を詩歌から考える"Poetic Urbanism"に取り組んでみたい！

A3 個人と社会がつながる場

A4 #都市計画 #地域共創 #土木 #写真
#ZINE

井上諒子 (写真・左)

MIRAI-INSTITUTE株式会社

PYNTコミュニティオーガナイザー

A1 5日/週

A2 伝統文化の継承とネイチャーポジティブな都市

A3 「未来への希望のタネが集まる場所」

A4 #音楽 #飲食 #コミュニケーション



祖父江一宏

日建設計 コモンズグループ

A1 2-3日/週

A2 CO2減(CN)カーボンニュートラル、素材の循環、新しい素材の利用価値

A3 新しい出会いと刺激の場

A4 #コモンズ #コモンスペース
#プロジェクトデザイン



正心麻里子 (写真・右)

MIRAI-INSTITUTE株式会社

PYNTコミュニティオーガナイザー

A1 2日/週

A2 働くとウェルビーイング、次世代のインフラ・モビリティ

A3 人の興味関心がクロスし、セレンディビティが沸き起こる場所

A4 #人の話を聞く
#コミュニティオーガナイズ
#醸しのブースター



吉田瑛里香

日建設計 東京コーポレート部

A1 2-3日/週

A2 地方創生、社内エンゲージメント

A3 仕事場とプライベートの間の場所

A4 #施設管理 #セキュリティ

新居壮真

日建設計 設計監理部門

A1 1回/週

A2 Future Platform / 世の中の取組を一望して、未来についての解像度高い議論をサポートするツールの持続的運用及び販売

A3 社外との窓口

A4 #建築設計



平間悠

株式会社UniGrowth

A1 5日/週

A2 スマートホーム、IoT、自動化、ヘルスケア

A3 イノベーションのプラットフォーム

A4 #ソフトウェア開発 #IoT #スマートホーム
#Bluetooth #API #ヘルスケア



山口豪志

株式会社ダイブ

A1 2日/月

A2 人にも生物にも住みやすい地域づくり

A3 「色んな感性と価値観が混じり合う場所」

A4 #ベンチャー投資 #事業開発 #コネクター
#昆虫好き#広報



山田和雅

株式会社BIOTOPE

A1 2-3回/週

A2 メンタルヘルス、エネルギー循環、障害者・インクルーシブなまち

A3 可能性が集まり、ひらく場所

A4 #ビジネスデザイン #システムデザイン #ファシリテーション

金子知弘

日建設計 環境デザイン室

A1 1日/月

A2 脱炭素、環境デザイン、水利用、家電開発

A3 新しい出会い、新しいことへのチャレンジ

A4 #環境デザイン #シミュレーション

大久保康路

日建設計 設計監理部門

A1 3日/週

A2 宇宙関連プロジェクト、DX化で変わる建築

A3 2.5nd place / 日建のなかの時空のゆがみ

A4 #宇宙建築 #SAL #DX化建築

安原直義

日建設計 東京オフィスCR部
シニアマネージャー(兼)長野支所長

A1 4-5日/週

A2 ビジネスネットワーク活動(「6次の隔たり」の社会実験)

A3 A^B^Cの同時共創の場(A:担当ビジネス、B:会社内打ち合わせやコミュニケーション、C:ボーダーレスのthe 3rd place)

A4 #建築家

田沼理咲子(写真・左)

フロンティア日建設計 FM室

A1 3日/週(週3出社)

A2 インクルーシブデザイン、部署関係なくランチメンバーを組めるシステム、おいしい環境建築、GLOCAL

A3 自由、クリエイティブ、フラットに誰もが繋がる場

A4 #インクルーシブ #視覚障害
#コミュニケーション営業力 #スパイス
#PYNTへの愛

青谷瑞紀(写真・右)

日建設計 コーポレートG代表付

A1 2日/週

A2 インクルーシブ、環境、スポーツ

A3 新しい楽しいことを生み出す場、ヒントが得られる場、イベントから吸収・学びの場

A4 #保育 #教育学 #心理学 #スポーツ
#設計

柄澤薫冬

日建設計総合研究所 都市部門

A1 週1のはずが…週4!

A2 地域共創:地域の個性を活かした生活者目線の用途混在と緩やかな地域内の循環を生み出したい

A3 沼とか麻薬とか

A4 #都市計画 #地域デザイン #官民連携
#アセット活用 #まちやど

伊藤光平

株式会社BIOTA 代表取締役

A1 2-3ヶ月に1回

A2 ランドスケープ、生物多様性、建築

A3 温かく迎え入れてくれて前向きになれる場所

A4 #微生物多様性 #ゲノム科学 #生命科学

三井祐介

日建設計 コモンズグループ
コマーシャルエクスペリエンス部

A1 3日/週

A2 各テーマを俯瞰して構造を把握すること(IDセンターとして)。サーキュラーデザインについて、環境省庁舎移転PJで実践中

A3 私の分人の1人の居場所

A4 #建築設計 #デザイン #公共空間
#行動変容 #プロジェクトデザイン

岩谷純子

日建設計 イノベーションデザインセンター

A1 4-5日/週

A2 多世代による共創、幸せな暮らし、地域の居場所

A3 希望

A4 #プロジェクトマネジメント #癒しの環境

石橋萌

MIRAI-INSTITUTE株式会社
PYNTコミュニティオーガナイザー

A1 ほぼ毎日あります!!!PYNTLOVE♡

A2 働くの未来、コミュニティ醸成、ウェルビーイング

A3 居場所、少し先の未来を常を感じられる場所

A4 #コミュニティオーガナイザー

小野竜也

日建設計 設計監理部門

A1 2-3日/週

A2 空飛ぶクルマの取り組み

A3 NIKKENの敷居を下げる場所

A4 #建築デザイン

INTERVIEW

YURIE KIBI

ASUKA YOKOYAMA

MOE ISHIBASHI

PYNT“チーム”が耕し、 コミュニティからつなぐボタン

INTERVIEW

日建設計 イノベーションセンター
吉備 友理恵

日建設計 イノベーションセンター
横山 明日香

MIRAI INSTITUTE株式会社
コミュニティオーガナイザー
石橋 萌

PYNTの運営は、日建設計イノベーションデザインセンターを主体にしながら、日建設計の外から関わり常駐する「コミュニティ・オーガナイザー（以下CO）」と行っています。COは、まるで元々の知り合いのような、けれども馴れ馴れしくない絶妙な距離感で、PYNTを訪れる人たちにカウンターから話しかけてくれます。彼ら・彼女らの仕事は、良い雰囲気をつくることから、新しい価値が生まれるプロジェクトの芽を育むために、コミュニティの土壌を作ること。PYNTチームはどのようなことを考えて、日々コミュニケーションを取り、価値創造へとつなげているのか？ チーム3名でお話しました。

——コミュニティ・マネージャーという役割はよく耳にしますが、コミュニティ・オーガナイザー（以下、CO）は聞き馴染みがありません。石橋さん率いるCOチームはPYNTでどのような仕事をしているのでしょうか？

石橋 萌 通常コミュニティ・マネージャーというと、場や組織の状態を管理し、コミュニケーションを促進させるための役割です。一方で、私たちが行っているのは良いコミュニティ

が生成されるために適切な状況をつくること。PYNTを訪れる人たちが自然につながり、つなぎ合わせたりしながら、新しい価値をつくるための土台をつくっています。

やっていることは大きく2つ。1つは、日建設計社内でのコミュニケーションを活性化させていくこと。私が所属するMIRAI-INSTITUTEではこれまで企業が運営する施設を支援させていただき、つまり本社とは別の場所で活動することが基本で、PYNTのように日建設計の本社内にある場に関わるのは初めてでした。なので、社外の方だけでなく社内の方たちのコミュニケーションにまで入ることは、私たちにとって新鮮でもありチャレンジでもあります。

まずはPYNTへ来ていただいた社員さんに対して声をかけ、その人のことを知り、またPYNTに来てもらうためにはどうしたらいいか？ またはどうやってその人のことを知っていきもっとPYNTに巻き込んでいけるか？ということを考えています。

もう1つは、共創の6ステップ（※P14参照）のうち、STEP1「MEET:出会う」とSTEP2「CROSS:お互いを知る/つなぐ」に対するアクションです。その人がどんな人で、何に興味があるのか、どんな専門性をお持ちなのかを理解した



“異なる役割が混ざり合うチームだからこそ、
多様な発想やネットワークをかけ合わせてつなぐ”

うえで、適切なおつなぎをすること。さらに、議論を深めるフェーズであるSTEP3、つまり「この人とこの人をつなげたらおもしろいことが起きそうだ」の先の展開を想像することや、既存のプロジェクトにどう関与しうるかを考えながらアクションを取ることを意識しています。

横山明日香 コミュニティマネージャー的な役割を置くことは、最初から要件の中に入れていました。でも、私たちがやりたいのは組織を超えて人と人を混ぜ、耕しながらコミュニティの土壌をつくっていくこと。お客様対応ではなくフラットに接することができ、能動的に働きかけながら、信頼関係が築けるような存在を求めています。

吉備友理恵 PYNTを運営する私たち日建設計イノベーションデザインセンター（以下、イノベチーム）のユニークなところは「社内外の実践者をつなぐ、共創プロジェクトの伴走者」が専任していることです。伴走するためにはイノベーションを生むための仕組みや仕掛けが必要ですが、そのなかでもプロジェクトになる前の「コミュニティの土壌をつくる」段階で特に重要な役割をCOチームが担ってくれています。

（石橋）萌さんたちがいることによって、人との出会いの数やコミュニケーションの総量、関係構築の数が圧倒的に増えています。これをきちんと共創活動につなげていくために、COチームとイノベチームは日々連携しながら動いています。

——PYNTの窓口として日頃多くの方々とコミュニケーションを取っているCOチームと、プロジェクト伴走者にもなるイノベチーム。具体的にどのような連携をしているのでしょうか？

横山 社内のどの人に繋げると良いか、既存のプロジェクトでどこに組み込めそうかという会話をしますね。バトンの受け渡しが雑になるとその後の共創ステップもうまくいかないの、丁寧な情報共有と相談をしながら前に進めています。

この手の情報は、常駐するスタッフの「誰か」に閉じた属人性の高いものになりがち。ですが、PYNTの場合は、役割の違いこそあれどCOもイノベもひとつの「PYNTチーム」として動いていることが強みです。100%全員に共有して理解することは難しいですが、異なる役割が混ざり合うチームだからこそ、多様な発想やネットワークをかけ合わせてつなぐことを意識しています。

また、COチームにはPYNT内のツアーや打ち合わせ、社内外の方が主催するイベントや展示のサポートもお願いしています。他社の所属からPYNTチームとして関わり、その人の見えていなかった側面やより深いところをすくい上げてくれることも、良いコミュニティから実際の活動へと進めていくために大切なことです。

吉備 先述の通り、私たちイノベチームはプロジェクト伴走者としての役割も担っています。その時、いかにして社内外の実践者を巻き込んでいけるかが重要であり、その観点から「コミュニティ」と「プロジェクト」が分断されず、いかにシームレスにつないでいけるかを重視しています。

そのために、口頭でのキャッチアップはもちろん、ツールを用いた情報共有も行っています。COチームが今日どんな人とどんな会話をしたか、どんな考え方でどんなことをやりたいと思っているかなどを毎日共有してくれています。そのおかげで、私がPYNTにいけない日も続いても、次にその人と会ったときのコミュニケーションを考えることができるんです。

——PYNTができて約2年。コミュニティの観点で、オープン当初からどのような変化が起きていますか？

石橋 PYNTで「やりたいことができるんだ」と思っている人数は確実に増えていると感じています。日頃の挨拶はもちろん、もう一歩踏み込んで「こんなことできるかな」とか「こんなこと考えてみたんだけど」といった声をかけてもらうことが増えました。

吉備 主体者が増えた、ということですね。展示やイベントも最初は私たちが走り回っていましたが、いまイベントは約週1回ペースで開催、かつ持ち込み企画や社内開催のもので私たちが企画する必要がなくなっているのはすごいことだと思います。

横山 一歩引いて見ると、「PYNTらしい状況」ができたと言えるかも知れません。いつ来ても賑わっていて、常に変化しつづけている。いつも同じ人たちが集まる場だったら起きにくいことが、日々色々な人が行き交いながらさまざまなフェーズのプロジェクトが進んでいるPYNTだからこそ

生まれているのだと思います。

外の方にとって、PYNTはアクセスが良い場所でもなければ、ワークスペースとして使いやすいわけでもない。にも関わらず、PYNTを好きで、能動的に何かを求めている人が日々来てくれています。そういうときに、COチームが手を繋いでくれて、前向きなコミュニケーションをしてくれるからこそ、次のステップへとつながる良いコミュニティが育まれているのだと思います。

吉備 誰に対してもいつも笑顔で挨拶をしてくれて、たとえ雑談であっても決して忙しそうなお素振りもせずカジュアルに接してくれる。ときには一歩踏み込んで人を紹介することもあるし、メンバーの悩み相談にも乗ってくれる。

そんな萌さんたちの行動すべてが「まちの未来に新しい選択肢をつくる」共創プラットフォーム・PYNTの土台づくりにつながっています。今後人や拠点が増えていくうえで課題もたくさんありますが、チームや役割の垣根を超えて一緒にPYNTを盛り上げていきたいですね。



吉備 友理恵(写真・左)

日建設計 イノベーションセンター。東京大学大学院新領域創成科学研究科修了。マルチステークホルダーの共創、場を通じたイノベーションについて研究・実践を行う。共創を概念ではなく誰もが取り組めるものにするためのツール「パーパスモデル」を考案し、書籍化。現在は、日建設計にて共創の場「PYNT(ピント)」を企画運営し、社会課題に向き合う共創プロジェクトのインキュベーションに取り組む。

横山 明日香(写真・中央)

日建設計 イノベーションデザインセンター。京都工芸繊維大学・同大学院の仲隆介研究室にて、ワークプレイスについて研究。2017年に日建設計に入社し、2021年から現職。現在はPYNTの企画運営に携わりながら、社内外のイノベーション創出の支援やそれに関わるプロジェクトに取り組む。

石橋 萌(写真・右)

ワーキングコミュニティ「MIDORI.so」を運営するMIRAI INSTITUTE株式会社 委託事業担当。コミュニティオーガナイザーとして、他社が運営するワークスペースの「仕込み」とコミュニティの「醸し」のお手伝いをするほか、地域活性化企業人として、檜原村の関係人口創出に取り組む。

2023-24年の軌跡

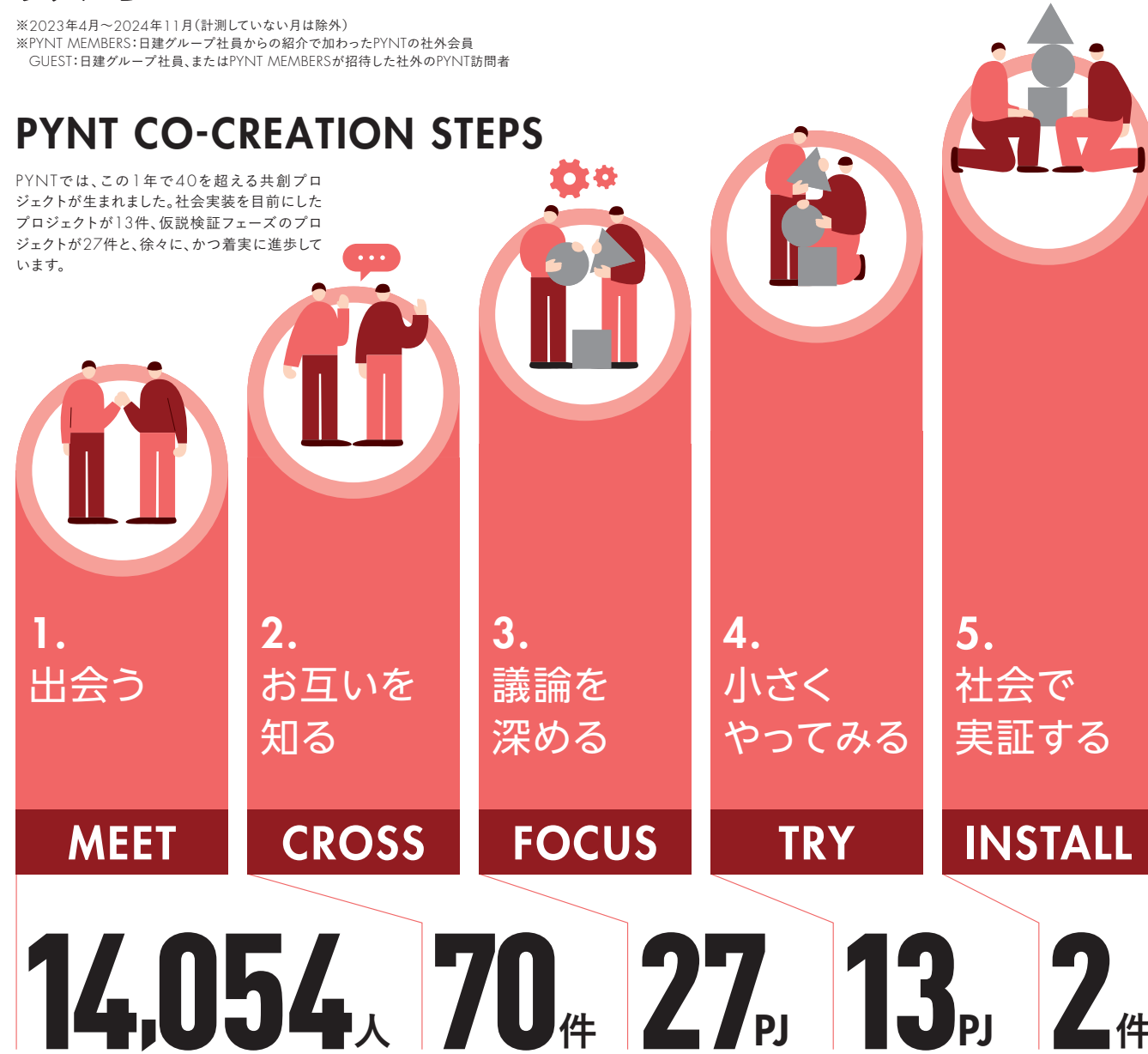
UPDATES

数字でみるPYNT

※2023年4月～2024年11月（計測していない月は除外）
 ※PYNT MEMBERS：日建グループ社員からの紹介で加わったPYNTの社外会員
 GUEST：日建グループ社員、またはPYNT MEMBERSが招待した社外のPYNT訪問者

PYNT CO-CREATION STEPS

PYNTでは、この1年で40を超える共創プロジェクトが生まれました。社会実装を目前にしたプロジェクトが13件、仮説検証フェーズのプロジェクトが27件と、徐々に、かつ着実に進歩しています。



PYNT MEMBERS

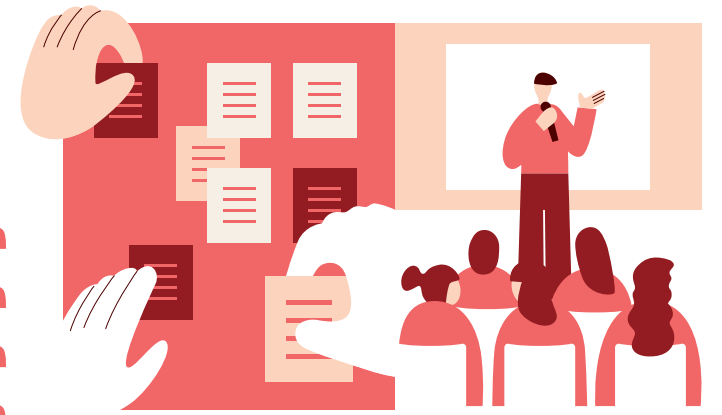
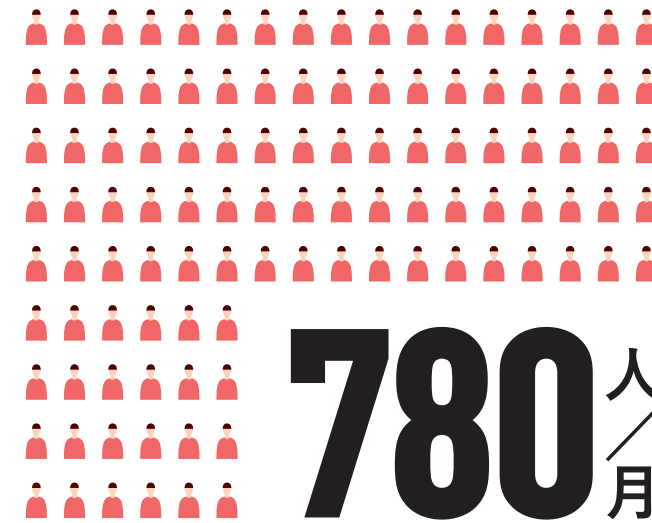
PYNTを利用する社外の“PYNT MEMBERS”の数は、2023年10月時点の139人から倍増。出会いの数は増え、これまで以上に多様な方々が集まってきました。PYNTに來たら何かが起こる、そんな場としても活用していただきたいと思います。

371人



GUEST

社外からのゲストは1日平均で約30名以上。PYNTのツアーや説明から興味を持ち、関わりたいと思ってくれた方がPYNT MEMBERSとなり、PYNTを利用してくださっています。



PYNTで開催したイベント

月間にする約7回、社内向けの小規模なものやワークショップも入れると1日に1件以上のイベントがPYNTで開催されています。テーマも「より良い難民キャンプの環境とは?」「ローカルなまちづくりのはじめかた」など多岐にわたり、開催情報はPYNT内掲示板、またはメールマガジンなどで随時お知らせ中!

125回

カフェ提供数

スターバックス1店舗あたりの1日平均提供推定数が約500～600杯と言われていますが、PYNTのカフェではそれに匹敵する数のドリンクが日々提供されています。多くの方でコーヒーを片手に、雑談や打ち合わせなど各々の時間を過ごしています。

約500杯/日



外部ゲストのツアー

日建設計のクライアント企業から個人の知り合いまで、PYNTを初めて訪れた方へのご案内ツアーを開業以来1,000回以上実施しました。PYNTチームが直接、一人ひとりと丁寧にコミュニケーションを取りながら、PYNTの背景や共創の仕組み、空間や展示の詳細などをご紹介します。

1,016回



日建グループ社員へのアンケートで
PYNTの利用目的を「社外とのコミュニケーション」と回答した割合

日建グループ社員にとって仕事の息抜きや気分転換に訪れることが多いPYNTですが、PYNTの利用目的について聞いたアンケートでは約半数が「社外とのコミュニケーション」と回答。今後の社内外の共創活動につながっていきます。

42%



社内PYNT FRIENDS

(社内システムのチャットに入っている日建グループ社員の合計数)

PYNTを展示・イベントなどで利用する社員から、地道に社内のチャットグループに招待しており、現時点で日建グループ約3,000人のうち6人に1人が関わるコミュニティになりました。チャットではイベントや進行中のプロジェクト情報などを定期的に発信し、社内メディアとして活用されています。



527人

102人

OUR BOOKSオーナー

「OUR BOOKS」は、日建グループ社員とPYNTメンバーズが「本棚オーナー」となって自分の選書を設置できるコーナーとして、オープン以降、累計102人にオーナーになっていただきました。本であれば小説から漫画まで、ほかにも自作のイラストや模型を設置し、お互いを知りながら関係性が広がるスペースになっています。

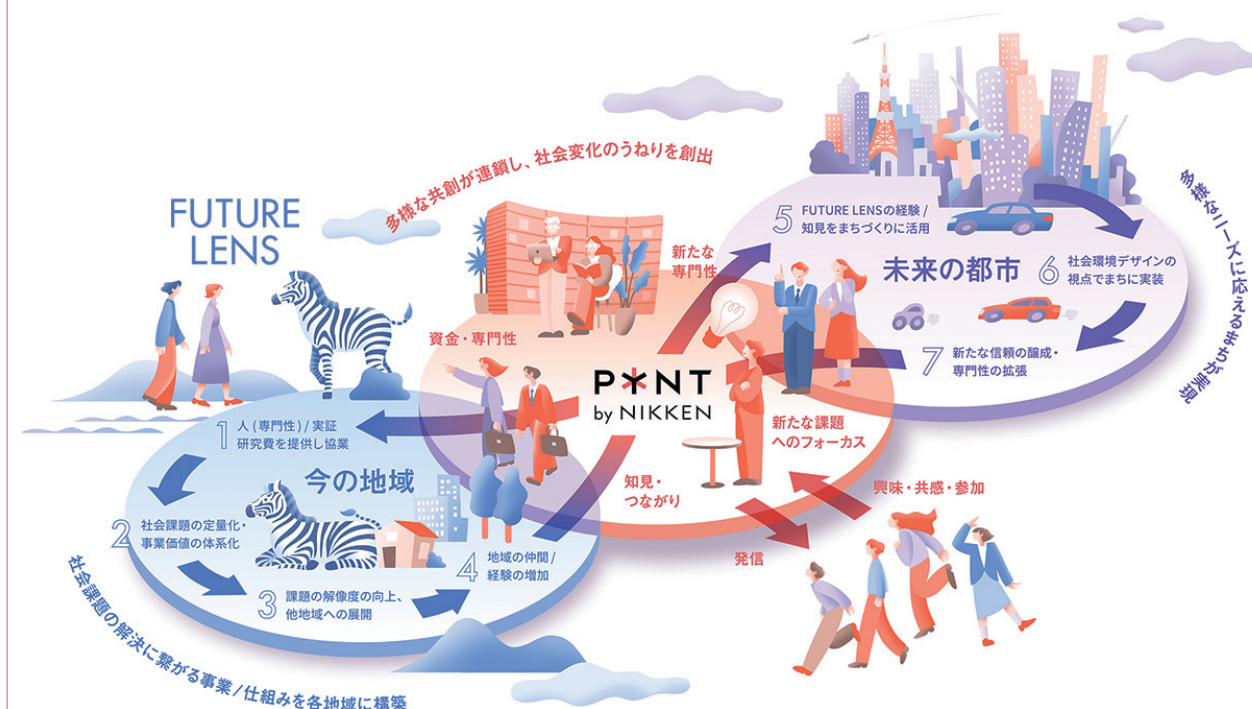
31件

PYNT展示

PYNTでは、プロトタイプも含んだ、開発の途上にある取り組みを展示してきました。社内外の方と発想を膨らませながら可能性を模索し、次のステップに進むためのインタラクティブなコンテンツとして機能しています。

「FUTURE LENS」始動

日建設計は、ゼブラ企業への投資や経営支援等を行うZebras and Company(Z&C)と共に、共創型社会環境デザインプログラム「FUTURE LENS」をスタートしました。2025年には、審査会を経て4月頃に採択事業者が決定する予定です。PYNTチームは実証研究費の提供だけでなく、Z&Cと共に事業者に伴走。社会環境デザインの視点から、地域の社会起業家と共創し、より広い社会課題解決を目指す仕組みづくりに取り組んでいきます。



● 編集後記 ●

PYNTオープン以来の取組みを、ブックの制作を通して振り返りました。ご覧くださり、ありがとうございました。さらに活動を推し進めていくため、みなさんの参加をお待ちしています。またぜひ、カウンターにお立ち寄りください！

● 最新情報はここから！ ●

WEBサイト



NOTE



PYNT BOOK Vol.1

企画	株式会社日建設計 イノベーションデザインセンター
編集・デザイン	株式会社BIOTOPE + 三浦佑介
デザイン協力	株式会社日建設計 プレゼンテーション部
写真	中川晃太 (P20-24) 田野英知 (P16-19)
お問い合わせ先	株式会社日建設計 PYNTチーム e-mail: pynt@nikken.jp
初版発行	2025年3月

